

実親との関係良好度評価 NFRJ98-03 の比較

田中 慶子

(東京都立大学大学院社会科学部)

The Evaluation of the Relationship with Parents by Adult children: A Comparison NFRJ98-03

TANAKA Keiko

成人子と親との関係を中心に、わが国の家族社会学における「情緒」の測定の問題を概観し、NFRJの情緒項目についての位置づけを整理した。関係良好度とは、「適応」次元の「構造」についての総合的な評価である。基礎的な集計にとどまるが、NFRJ98 と NFRJ03 を比較し、社会経済的属性と関係良好度との関連をみたところ、女性、有配偶、高学歴層（ただし男性のみ）において父母ともに良好であると評価する者が多く、また、NFRJ98 とくらべ、NFRJ03 では、全体的に父母ともに良好である者の出現率は増加していること、男性のみに出身階層による出現率の違いがみられるようになった。

キーワード：関係良好度、情緒、測定

1. はじめに

「家族の機能は、情緒的機能に特化していく」「人びとの家族に対する情緒的希求は高まっている」等々、家族と「情緒」との関係が議論されるようになってから久しい。家族変動は、形態の変化だけでなく、「親子関係中心から夫婦中心の家族観への変化」であると捉えられるなど、家族内の人間関係のあり方の変化、特に人びとの自身の家族との関係についての認識や位置づけの変化が注目される。

「近代家族」においては、夫妻の愛情と母子関係を中心とした親子の少人数での強い情緒的関係が基本となり（落合，2004）、家族内の「情緒関係」は強化されると考えられる。そのいっぽうで「かつては家族の絆が強かったけど、現在は・・・」という家族危機論や家族解体論に典型的にみられるように、家族内の人間関係の弱体化や危機が論じられる。とくに、近年の景気の悪化は、家族の「絆の感覚」を不安定なものとし、家族関係を困難なものにしているといわれる（山田，2004）。わが国の全般的な傾向として、家族関係のあり方は変化しているといえるのだろうか。その趨勢を観察することが必要である。

本稿では、成人子と親との関係を中心に、わが国の家族社会学における「情緒」についての実証研究、特に質問紙法による親子の情緒関係の測定の方法を概観し、NFRJの情緒項目についての位置づけを整理する。次に実親との関係良好度についてNFRJ98 との比較をおこない、2時点間ではあるが、関係評価の変容についての検討をおこなう。

2. 家族社会学における「情緒」の測定 親子・世代間関係を中心に

ところで、家族社会学における「情緒」の問題は、戸田貞三の家族定義にみられる「感情融合」や「友愛家族」の成立など、最初期から多大な関心が向けられていたにもかかわらず、研究蓄積はあまり多くなく、近代家族論以降、「愛情」の問い直しや実証研究の必要性が提起されている（山田，1999）。だが、これらの議論が深化しない背景には、わが国の家族社会学における「情緒」研究の方法論的な問題があると思われる。（ここでも括弧つきで表記しているが）そもそも「情緒」や「愛情」などの定義や指し示す事象も判然としない。最初に、家族社会学において何が「情緒」として把握されてきたのか、実証研究の成果を中心に概観しよう。

2-1 家族社会学における「情緒」研究

（義・継関係も含め）親子間の愛情や葛藤についての語りや、「甘え」など文化的特徴としての母子を中心としたわが国の家族関係のあり方については、多くの研究蓄積があり、社会的にも他の研究領域においても常に高い関心をあつめている。家族社会学において、一般に「情緒」の研究といえば、満足度やコミュニケーションを扱う領域という理解が中心であろう。特にわが国では、欧米流の夫婦制家族への変動に強い関心をおいていたことから、主に米国の実証研究を参照し、夫妻関係の「質」、すなわち夫妻間の平等や「結婚満足度」が主たる指標とした比較研究がおこなわれている（上子，1993）。

だが、いったい何を指して「情緒」なのか、その概念の用いられ方には混乱がみられる。「情緒」「愛情」という概念は、要約すれば「夫妻の家事分担が不平等でも、夫婦関係満足度が低くないのは、夫妻に愛情があるからだ」という説明例に典型的に示されるように、複層的な意味が同時に用いられている。まず、第1に、析出可能な事象の理論・説明（ここでは家事分担）に対し、残余的ロジックとして用いられる「情緒」（愛情という「みえない」ものによる説明）。第2に、情緒構造における析出可能な事象として用いられる「情緒」（夫婦関係満足度という指標）。第3に、2点目の残余カテゴリーとして用いられる「情緒」（夫婦関係満足度という指標では捉えきれない、愛情）。

このように「情緒」という概念は、（そのことがあまり意識されることなく）同時に複数の意味で使用されており、基本的には説明できない「残余」を指し示すものとして用いられてきたのではないだろうか。以下では、具体的に何らかの指標によって測定・把握されている「情緒」の研究を概観しよう。

2-2 「情緒」の測定についての動向

家族社会学において親子関係の情緒関係は、どのように把握・測定されてきたのであろうか。はじめに代表的な田村健二の「情緒」の定義を確認しておく。「情緒とは状況に対応する主体の反応の動きである。したがって、家族の情緒構造とは、家族生活において各構成員が主体的にどのような反応をしつつ人間関係を形成し、これを維持発達させてゆくか、その構造面をみることになる」という（田村，1969：117）。また、具体的な方法として、家族の情緒構造は、「方法的にはソシオメトリーのような手法を用いることによって把握することが可能であるし、また成員相互の、一方が他方に対してもつ欲求の水準（期待）と、その欲求するものが他方に欠けていると認知する水準

(現実認識)との間のズレがもたらす欲求不満(frustration)の調査によってつかむことができる」(松原, 1966)という。

では、具体的に親子関係を対象とした実証研究では、「情緒」「情緒構造」として、どのような指標で、何が測定されてきたのであろうか。戦後の実証研究を3つの時期に分け、代表的な研究を取り上げて検討する。

1960年代までの家族研究においては、わが国に民主的な家族が普及し根付いているか、もしくは旧体制の「家」の残滓がみられるかを検討することが実証研究の中心的な課題であった。イエから脱却し「民主的な家族」の成立が目指されているなかで、「現代の家族は、古い慣習や家制度から解放されて、純粋な人間集団になってきたといわれている。(中略)親子が愛情によって結ばれ、内部の人間関係は相互に人格の尊重を前提にした平等の関係にもなってくるという。友愛としての家族は、その結合が相互の愛情に基礎をおく親しい結びつきを特色としているというものである。こうして現代の家族においては、その内部の人間関係において愛情の授受ということが本質的な意義をもっている。」(松原, 1966)という認識に示されるように、親子を、愛情の下に解釈可能なことこそが実践的・理念的な目標であった。親子関係とは本質的で自然なものと捉えている⁽¹⁾。葛藤などの「問題」は、家族変動(=民主化)による「ひずみ」によってもたらされているのであり、都市・農村という地域差や、「家」世代・民主化世代というコーホート、階層差という構造的な理由が、家族本来の機能を抑制しているものと捉えられる(桑畑, 1953; 1955)。この時期以降、「問題家族」と「一般家族」に区分され、前者は主に心理学、社会福祉学などの領域に、後者は社会学的な領域へと分化していった。

1970~1980年代は、欧米の実証研究を積極的に取り入れた、わが国独自の家族調査がおこなわれ、「愛情」や調和的な家族関係を測定し評定することに多大な関心が払われている(たとえば、湯沢編, 1971など)。特に発達心理学(ハヴィガースト)や小集団論(パーソンズとベールズ)の影響を受けた調査がおこなわれている。

増田光吉(1971; 1974)は、家族間の情緒的關係や人間関係を日本の实情にあわせて把握するために、「親子間の親和度」を測定している。中学生を対象に情緒的關係の測定として、会話頻度、子どもについての知識、接触頻度、家庭のふんい気(アフェクション・スケール)を取り上げている。

パーソンズ理論に大きく影響を受けた研究も多く、AGIL理論を操作化し「統合」の指標として両親に対する受容・拒否尺度と結婚満足度の関連を検討した斧出節子・本村汎(斧出・本村, 1986)や、ベールズの小集団論に依拠し、親子の關係性を、相互の評価、抑制・助言、情報、コミュニケーション、共同活動という5つの軸から把握し、そのうちダイアド間の相関係数の高さから、コミュニケーションが關係性の中核であるとし、具体的な接触量との関連を検討した山村建、柏熊岬二らなどの研究が代表的であろう(山村, 1970)。

成人子と老親を対象とした湯沢雅彦(1973)は、孤老・棄老といった当時の老人問題への関心から、「同居子との濃密接触、別居子との疎遠な交渉」という、いわゆる那須・湯沢命題に端的に示されるわが国の成人子親子の關係構造をあきらかにした。家族ならば愛情があり、それが主觀的幸福感の基礎となっていることを前提とし、さまざまな条件(經濟狀況など)を実証的に検討した結果、相互作用の「量」を指標として、相互作用によって(多少の葛藤が生じることを認めながらも)本来的に備わっている「愛情」が促進されるという理論的説明を採用している。

以上のように、1980年代までは、構造機能主義的なアプローチに依拠し、子どもの社会化や成人のパーソナリティの安定を最適におこなう「家族」の条件として、民主的な家族を評定するという発想にもとづき、わが国独自の要素を加味した指標の開発がおこなわれた。精査の結果、居住関係のあり方に規定される親子の構造が「情緒」基礎にあり、満足度や会話といった指標によって「情緒」が適切に捉えているとされ、それ以降の多くの研究が追随している。

近年では、上記の構造機能主義とは異なるアプローチからの研究もおこなわれている。ひとつは、ライフコース論的なアプローチであり、いまひとつは、ストレス論的なアプローチである。ライフコース論的なアプローチにおいては、交換理論による交換（報酬量）と情緒との正の相関関係を想定し、世代間関係に適応した世代間連帯理論において、ひとつの次元として情緒構造（関係の良否や親和度）が設定され、理論を検証する試みがおこなわれている（代表的なものとして、森岡・青井，1991；春日井，1997）。ただし尺度の内容は、上述の構造機能主義的な測定項目とほぼ同じであり、情緒構造が世代間連帯の下位次元としての独立性が十分ではないといった問題が指摘される（Bengtson & Robert，1991）。いっぽうストレス論的なアプローチにおいては、個人の主観的状态に作用する環境として「システムとしての家族」やダイアド関係、サポート・ネットワークとしての家族に注目する。そこでは、個人もしくは父子・母子など「セット」のデータを収集し、さまざまな指標を用いて、個人の構造的な布置や役割遂行状況が個人の well-being に及ぼす影響について、状況や関係性に対する認知や意味づけを媒介変数とした分析がおこなわれている。子どもの認知する親子関係の評定では、西出（1993）や飛田・狩谷（1992）などが引用されることが多いが、ライフステージや観察単位（個人レベル、親の夫婦関係レベル、家族全体）によって、さまざまな尺度が提案されている状況である（若原，2003；北村・無藤，2001；平井・岡本，2003など）。

3．NFRJの情緒項目の検討

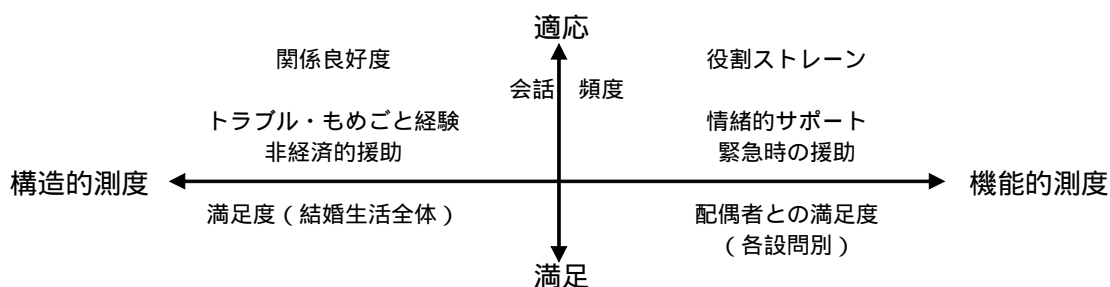
3-1 関係良好度の構成次元

では、本稿でとりあげる関係良好度とは何を測定しているのだろうか。家族関係や測定などについてのレビューを参考に（代表的なものとして、Touliatos, et al., 2001; Treas & Lawton, 1999）、親子・世代間関係の「情緒」の測定方法について、いくつかの軸を設定し、分類を試みたい。ここでは暫定的に「情緒」が指し示す事象とは、非物質的な対人関係の相互作用に対する知覚・評価であるとす。評価は「適応」と「満足」の2つの次元に区分することができる（Sabatelli, 1988）。「適応（adjustment）」とは、積極的なコミュニケーション、夫婦の問題解決志向、葛藤が少ないという、「よい関係」に必要なプロセスとみなされている機能や相互作用をさし、自己評価である限りにおいて主観的ではあるが、事実認識を問う客観的な側面をもつ。たとえば結婚の幸福度や、トラブルの有無、離婚の危機といったことが該当する（Acock & Demo, 1994）。いっぽう「満足（satisfaction）」とは、該当者やその関係性に対する態度、個人の主観的な印象を問うものである。前者の評価状況に対して、願望・欲求水準や社会的比較という要素も含めて判定された結果が「満足」であると考えられる。

もう1つの分類軸として、対人関係のどの側面に焦点を当てるのかによって区分する（橋本 2005）。ひとつは、「構造的測度」で、対人関係の特徴、具体的には個人と相手の置かれている布置状況に注目する。いまひとつは「機能的測度」で、相互作用の内容に注目する。これらの分類軸の組み合

わせから4象限が設定可能である。NFRJでは、家族の情緒関係について、関係の評価・満足度、役割ストレイン尺度、トラブル・もめごとの経験、会話頻度、情緒的サポート、緊急時の相談相手・援助源といった項目が該当する（日本家族社会学会，2000）。これらを上記の分類軸にしたがって整理すると図1のようになる。

図1 NFRJにおける「情緒」項目の構成次元



注：「会話頻度」は「構造」と「機能」両面の測度と考えられる。

本稿の整理にしたがえば、関係良好度は、「適応」次元から、「構造的測度」の認知を問うている設問として整理できる。より具体的には、関係の強度（心理的結びつきの強さ）や耐久性（結びつきの安定性）の総合的な評価を測定していると考えられる。

3-2 尺度の検討

最初に、性別・時点別に、配偶者（「全体」のみ）との満足度、父母、子ども、義父母、きょうだい（NFRJ03のみ該当）との関係良好度について平均点で確認しておこう。いずれの関係においても、4段階評価であるため、「悪い」もしくは「かなり不満」という否定的な評価に0点～「良好」「かなり満足」という肯定的な評価には3点と得点をあたえた（図1，表1，2）。まず評価得点をみると、満足度で尋ねている夫婦関係の評価は、低くなっている。これは、他の調査でも、ワーディングなどが異なってもほぼ同様の分布となり、誰を対象とした場合でも「適応」では最も肯定的な選択肢に、「満足」では2番目に肯定的な選択肢に回答が集中するためである。

男女とも、子どもに対する評価が最も高い点は同じであるが、以下の順位は、男性では義父母、きょうだい、父母の順であるのに対し、女性では母親、きょうだい、父親、義父母の順となっている。この順位は2時点ではほぼ変化がなく、女性の方が、血縁者（実親、きょうだい）との関係についての評価が高く、男性の方が、非血縁者（配偶者、義親）に対しての評価が高いことがわかる。

また、評価間の相関係数（表1，2）は、いずれも0.1%水準で統計的に有意で、父母間、子ども間など、対もしくは同一の位置にある者の相関は高く、その傾向は男性に顕著である。本稿の中心である、実親との関係良好度とトラブルの有無の関連を、役割ストレインをコントロールした偏相関係数でみると（表3）、個人単位で測定しているNFRJ03においても $r=0.3$ 台とあまり関連は強くない。同様に関係良好度と役割ストレインの関連についてトラブルの有無をコントロールして偏相関係数を求めたところ、 $r=0.1$ 台と、関連はあまり認められない（偏相関係数はいずれも0.1%で統計的に有意）。このように、関係良好度とトラブルの有無、役割ストレインは、関連は認められる

が、独立の事象を測定していると考えられる。

従来の尺度と比較すると、相手との間柄の評価を問うような先行研究のほとんどは、評価段階の幅も広く、多次元尺度で構成されており、加算法による得点がある程度広い範囲に分布するように設計されている。しかしNFRJのオリジナル項目である関係良好度は4段階評価による単一尺度であり、その結果、分布が「良好」に偏ってしまう点で分析には注意が必要である。

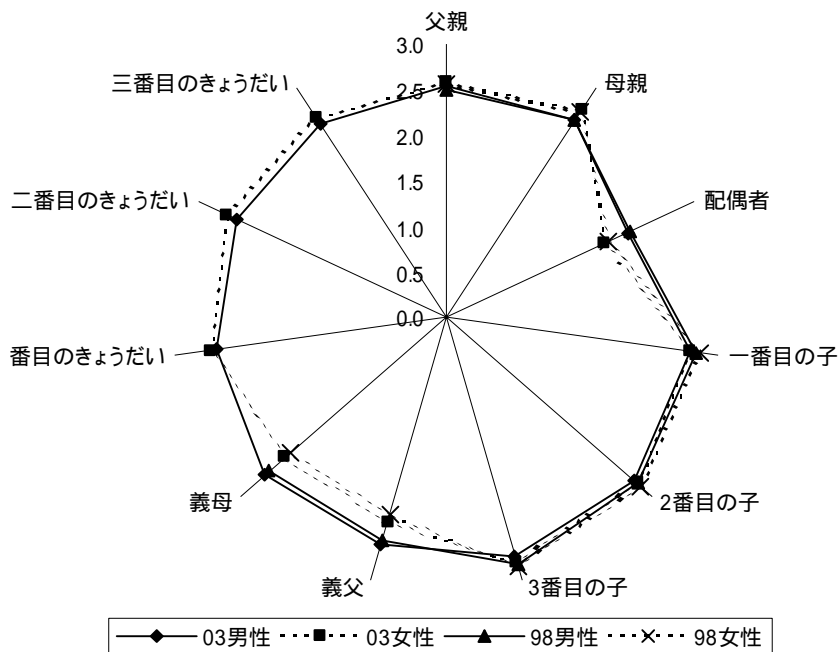


図2 性別・時点別 関係別の関係評価平均(0~3点)

表1 各関係評価間の平均点と相関係数<男性>

| 男性 | | 平均点 | N | 父親 | 母親 | 配偶者 | 一番目の子 | 二番目の子 | 三番目の子 | 義父 | 義母 | きょうだい 一番目の | きょうだい 二番目の | |
|--------|-----------|------|------|------|------|------|-------|-------|-------|-------|------|---------------|---------------|--|
| NFRJ03 | 父親 | 2.54 | 1080 | | | | | | | | | | | |
| | 母親 | 2.58 | 1661 | 0.71 | | | | | | | | | | |
| | 配偶者 | 2.19 | 2377 | 0.21 | 0.17 | | | | | | | | | |
| | 一番目の子 | 2.70 | 2349 | 0.30 | 0.26 | 0.25 | | | | | | | | |
| | 二番目の子 | 2.74 | 1910 | 0.26 | 0.24 | 0.23 | 0.71 | | | | | | | |
| | 三番目の子 | 2.75 | 615 | 0.13 | 0.22 | 0.20 | 0.54 | 0.70 | | | | | | |
| | 義父 | 2.61 | 972 | 0.43 | 0.34 | 0.20 | 0.25 | 0.27 | 0.34 | | | | | |
| | 義母 | 2.64 | 1439 | 0.41 | 0.37 | 0.24 | 0.30 | 0.32 | 0.25 | 0.87 | | | | |
| | 一番目のきょうだい | 2.55 | 2645 | 0.43 | 0.43 | 0.14 | 0.23 | 0.23 | 0.27 | 0.28 | 0.30 | | | |
| | 二番目のきょうだい | 2.55 | 1732 | 0.47 | 0.41 | 0.12 | 0.18 | 0.17 | 0.18 | 0.33 | 0.27 | 0.62 | | |
| | 三番目のきょうだい | 2.55 | 973 | 0.64 | 0.44 | 0.07 | 0.25 | 0.26 | 0.24 | 0.35 | 0.32 | 0.64 | 0.71 | |
| | | | 平均点 | N | 父親 | 母親 | 配偶者 | 一番目の子 | 二番目の子 | 三番目の子 | 義父 | | | |
| | NFRJ98 | 父親 | 2.51 | 1178 | | | | | | | | | | |
| 母親 | | 2.59 | 1882 | 0.72 | | | | | | | | | | |
| 配偶者 | | 2.23 | 2755 | 0.18 | 0.17 | | | | | | | | | |
| 一番目の子 | | 2.77 | 2660 | 0.22 | 0.21 | 0.22 | | | | | | | | |
| 二番目の子 | | 2.78 | 2201 | 0.22 | 0.20 | 0.21 | 0.60 | | | | | | | |
| 三番目の子 | | 2.83 | 785 | 0.20 | 0.27 | 0.20 | 0.52 | 0.66 | | | | | | |
| 義父 | | 2.55 | 1058 | 0.34 | 0.31 | 0.27 | 0.21 | 0.22 | 0.30 | | | | | |
| 義母 | | 2.58 | 1649 | 0.33 | 0.36 | 0.31 | 0.27 | 0.25 | 0.30 | 0.89 | | | | |

表2 各評価間の平均点と相関係数 < 女性 >

| 女性 | | 平均点 | N | 父親 | 母親 | 配偶者 | 一番目の子 | 二番目の子 | 三番目の子 | 義父 | 義母 | きょうだい 一番目の | きょうだい 二番目の | |
|--------|-----------|------|------|------|------|------|-------|-------|-------|-------|------|---------------|---------------|--|
| NFRJ03 | 父親 | 2.59 | 1317 | | | | | | | | | | | |
| | 母親 | 2.71 | 1948 | 0.60 | | | | | | | | | | |
| | 配偶者 | 1.91 | 2553 | 0.10 | 0.10 | | | | | | | | | |
| | 一番目の子 | 2.70 | 2863 | 0.18 | 0.21 | 0.15 | | | | | | | | |
| | 二番目の子 | 2.78 | 2323 | 0.14 | 0.17 | 0.18 | 0.55 | | | | | | | |
| | 三番目の子 | 2.81 | 743 | 0.10 | 0.17 | 0.14 | 0.48 | 0.56 | | | | | | |
| | 義父 | 2.34 | 924 | 0.28 | 0.27 | 0.22 | 0.18 | 0.17 | 0.02 | | | | | |
| | 義母 | 2.33 | 1478 | 0.25 | 0.21 | 0.23 | 0.17 | 0.14 | 0.11 | 0.83 | | | | |
| | 一番目のきょうだい | 2.60 | 2984 | 0.32 | 0.36 | 0.08 | 0.22 | 0.21 | 0.31 | 0.27 | 0.21 | | | |
| | 二番目のきょうだい | 2.65 | 1994 | 0.32 | 0.35 | 0.05 | 0.25 | 0.26 | 0.21 | 0.33 | 0.24 | 0.53 | | |
| | 三番目のきょうだい | 2.61 | 1100 | 0.19 | 0.28 | 0.13 | 0.21 | 0.24 | 0.20 | 0.20 | 0.13 | 0.53 | 0.54 | |
| | | | 平均点 | N | 父親 | 母親 | 配偶者 | 一番目の子 | 二番目の子 | 三番目の子 | 義父 | | | |
| | NFRJ98 | 父親 | 2.56 | 1348 | | | | | | | | | | |
| 母親 | | 2.70 | 2002 | 0.63 | | | | | | | | | | |
| 配偶者 | | 1.94 | 2822 | 0.12 | 0.08 | | | | | | | | | |
| 一番目の子 | | 2.79 | 3116 | 0.17 | 0.18 | 0.12 | | | | | | | | |
| 二番目の子 | | 2.84 | 2571 | 0.19 | 0.19 | 0.15 | 0.53 | | | | | | | |
| 三番目の子 | | 2.85 | 939 | 0.19 | 0.10 | 0.12 | 0.44 | 0.57 | | | | | | |
| 義父 | | 2.25 | 897 | 0.22 | 0.20 | 0.23 | 0.15 | 0.18 | 0.19 | | | | | |
| 義母 | | 2.25 | 1526 | 0.16 | 0.20 | 0.28 | 0.10 | 0.14 | 0.11 | 0.83 | | | | |

表3 父親・母親との関係良好度とトラブルの有無、親・義親とのストレインの偏相関係数

| | | 父親良好度 | | 母親良好度 | |
|--------|----------|-------|------|-------|------|
| | | 男性 | 女性 | 男性 | 女性 |
| NFRJ98 | トラブルの有無 | 0.14 | 0.13 | 0.09 | 0.15 |
| | ストレイン | 0.17 | 0.13 | 0.15 | 0.11 |
| NFRJ03 | 父親とのトラブル | 0.35 | 0.36 | 0.24 | 0.26 |
| | 母親とのトラブル | 0.24 | 0.26 | 0.34 | 0.38 |
| | ストレイン | 0.12 | 0.11 | 0.15 | 0.08 |

4. 実父母との関係良好度：NFRJ98 との比較

以下では、実父母との関係良好度に注目して、NFRJ98 との比較をおこなう。実親の生存率を考慮し、本人年齢 28～50 歳の範囲で、以下の条件を満たすものに限定して分析をおこなう。父母ともに健在で、実親であること、本人に離死別経験がないこと、父親・母親ともに関係良好度についての回答がある、実父母が同一居住地にあり、結婚継続している(親の婚姻関係の判定は、NFRJ03 のみ)。サンプル数は、NFRJ03 では 1642 (男性 731、女性 911)、NFRJ98 では 1826 (男性 803、女性 963) となった。

前述のように、関係良好度は、「良好」(= 3 点) に偏っていることから、ここでは、「良好」と評価する人の比率(出現率)に注目する。まず父母の評価の関連を確認すると、NFRJ03 では 68.8%、NFRJ98 では 65.8%とおよそ 7 割の者が父母ともに「良好」と評価している(表 4)。

表4 父親と母親の関係良好度

| | | | | | | (%) |
|--------|----------------|-----|----------------|----------------|------|------|
| | | 母親 | | | | |
| | | 悪い | どちらかとい えば悪い | どちらかとい えば良好 | 良好 | 合計 |
| NFRJ03 | 父親 | | | | | |
| | 悪い | 0.6 | 0.2 | 0.3 | 0.5 | 1.6 |
| | どちらかとい えば悪い | 0.1 | 0.9 | 1.2 | 0.7 | 3.0 |
| | どちらかとい えば良好 | 0.1 | 0.5 | 18.6 | 6.4 | 25.6 |
| | 良好 | 0.1 | 0 | 0.9 | 68.8 | 69.8 |
| | | 0.9 | 1.6 | 21.1 | 76.4 | 100 |
| | | 母親 | | | | |
| | | 悪い | どちらかとい えば悪い | どちらかとい えば良好 | 良好 | 合計 |
| NFRJ98 | 父親 | | | | | |
| | 悪い | 0.4 | 0.1 | 0.4 | 0.8 | 1.7 |
| | どちらかとい えば悪い | 0.1 | 1.0 | 2.2 | 1.2 | 4.5 |
| | どちらかとい えば良好 | 0.1 | 1.0 | 21.2 | 4.7 | 26.9 |
| | 良好 | | 0.1 | 0.9 | 65.8 | 66.8 |
| | | 0.5 | 2.2 | 24.8 | 72.5 | 100 |

注: 比率は、全体を100として求めた。

世代間の「適応」を測定している先行研究からは、女性、高齢層、有配偶、親の学歴が低い者が実親との関係を肯良に評価することがあきらかとなっている (Lye, 1996 ; Rossi&Rossi, 1990 ; Lawton et al, 1994 ; Umberson, 1992 ; 春日井, 1997)。そこで、性別、年齢、役割取得、出身階層別に、父母ともに良好と評価する者の出現率をみてみよう。結果は、表5にまとめて示す。

性別の出現率は、男性はNFRJ98で62.2%、NFRJ03では65.5%である。女性では順に69.1%、71.5%となっており、両時点とも女性の方が出現率は高い。2時点では比べると男女ともNFRJ03の方が両親ともに良好と評価する者が増加している。得点でも(3点満点)、父親との関係良好度は、男性がNFRJ98は2.55、NFRJ03では2.59に、女性も順に2.62、2.67と上昇している。同様に母親との関係良好度も、男性では2.63から2.66へ、女性では2.74から2.78へと上昇している。以下は性別に観察しよう。年齢の差は、男女とも統計的に有意な差は認められないが、NFRJ98では40代後半で最も出現率が高かったが、NFRJ03では、40代前半になっていることが注目される。婚姻上の地位と子どもの有無によってくれば(2)、男女とも有配偶・子どもなしで最も出現率が高い。

出身階層として、父親および本人の学歴をとりあげた。父親および本人の学歴による差異は、NFRJ03の男性のみにみられ、学歴が高くなるほど、出現率が高い。最後に、先行研究において世代間関係の最も基礎的な変数である居住との関連を、婚姻上の地位別にみると(図3)、男性の有配偶・同居における出現率の低さが顕著である。

以上のように、実親との関係が父母ともに良好であるという者は、女性、有配偶、高学歴層(ただし男性のみ)で多いことが確認できた。また、NFRJ98とくらべ、NFRJ03では、全体的に父母ともに良好である者の出現率は増加していること、男性のみに出身階層による出現率の違いがみられるようになったことが指摘できる。

表5 性別・基本属性別 両親ともに「良好」の出現率

| | | 男性 | | | | 女性 | | | |
|-------|---------|--------|----------|--------|----------|--------|----------|--------|----------|
| | | NFRJ03 | | NFRJ98 | | NFRJ03 | | NFRJ98 | |
| | | N | 出現率 | N | 出現率 | N | 出現率 | N | 出現率 |
| 性別 | | 731 | 65.5 | 863 | 62.2 | 911 | 71.5 ** | 963 | 69.1 *** |
| 本人年齢 | 28-29 | 82 | 64.6 | 113 | 60.2 | 98 | 68.4 | 111 | 68.5 |
| | 30-34 | 210 | 63.3 | 236 | 62.3 | 267 | 70.8 | 262 | 67.6 |
| | 35-39 | 184 | 67.9 | 201 | 59.7 | 222 | 69.8 | 254 | 68.5 |
| | 40-44 | 153 | 68.0 | 176 | 64.2 | 195 | 74.9 | 183 | 67.2 |
| | 45-49 | 102 | 62.7 | 137 | 65.0 | 129 | 72.9 | 153 | 75.2 |
| 役割取得 | 未婚・子なし | 153 | 59.5 * | 205 | 56.1 | 122 | 57.4 *** | 158 | 60.8 * |
| | 有配偶・子なし | 79 | 78.5 | 87 | 70.1 | 63 | 81.0 | 72 | 69.4 |
| | 有配偶・子あり | 481 | 65.7 | 571 | 63.2 | 716 | 73.0 | 733 | 70.8 |
| 父親学歴 | 義務教育 | 257 | 59.1 * | 341 | 58.1 | 329 | 69.0 | 374 | 67.6 |
| | 高卒 | 304 | 68.1 | 270 | 63.3 | 373 | 72.7 | 312 | 74.0 |
| | それ以上 | 151 | 70.9 | 165 | 65.5 | 179 | 73.2 | 181 | 68.0 |
| 本人学歴 | 中・高 | 276 | 56.5 *** | 368 | 60.3 | 348 | 71.3 | 441 | 67.1 |
| | 専・短 | 122 | 61.5 | 144 | 59.7 | 409 | 72.9 | 398 | 70.4 |
| | 大学以上 | 330 | 74.2 | 339 | 66.1 | 147 | 68.0 | 116 | 74.1 |
| 役割×居住 | 未婚・同居 | 126 | 54.0 * | 159 | 54.1 | 101 | 57.4 | 136 | 58.8 |
| | 未婚・近居 | 19 | 57.9 | 18 | 55.6 | 10 | 70.0 | 8 | 62.5 |
| | 未婚・遠居 | 26 | 84.6 | 28 | 67.9 | 21 | 57.1 | 14 | 78.6 |
| | 有配偶・同居 | 76 | 44.7 *** | 58 | 56.9 *** | 36 | 52.8 * | 144 | 52.8 |
| | 有配偶・近居 | 316 | 66.8 | 502 | 72.1 | 467 | 74.1 | 326 | 63.8 |
| | 有配偶・遠居 | 168 | 79.2 | 245 | 71.0 | 276 | 75.7 | 188 | 73.4 |

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

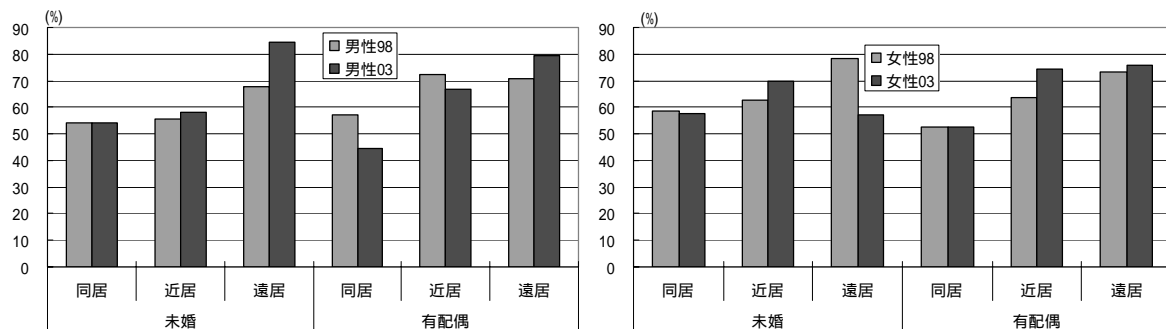


図3 婚姻上の地位・居住別 両親とも良好の出現率 (左:男性 右:女性)

5. おわりに

本稿では、成人子と親との関係を中心に、わが国の家族社会学における「情緒」の測定の問題を概観し、NFRJの情緒項目についての位置づけを整理した。関係良好度とは、「適応」次元から、「構造的測度」の認知を問うている項目と位置づけることができる。NFRJ98とNFRJ03との比較しながら、社会経済的属性と関係良好度との関連をみたところ、女性、有配偶、高学歴層(ただし男性のみ)において父母ともに良好であると評価する者が多く、また、NFRJ98とくらべ、NFRJ03では、全体的に父母ともに良好である者の出現率は増加していること、男性のみに出身階層による出現率の違いがみられるようになった。

本稿では、基礎的な集計による実親との関係良好度について、全体的な動向を把握するにとどまっている。しかし、NFRJ98 と NFRJ03 の 5 年間で、父母ともに良好であると評価する者の比率の増加（ただし、「悪い」と評価する者の比率も若干ではあるが増加傾向にあることにも注意が必要である）、学歴という階層による違いが、ジェンダーによって異なっているなど、興味深い動向の一端がみられる。今後は、この 5 年間の社会経済的な変化や、コーホート効果などにも十分考慮し、家族関係や個人の認知・態度に影響をおよぼす条件や、評価形成のメカニズムなどについて詳細に検討することが必要であろう⁽³⁾。

【謝辞】

「全国家族調査（NFRJ98）」データ使用にあたっては、日本家族社会学会全国家族調査委員会ならびに東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センターから調査個票データの提供を受けた。

本稿は、NFR98 検討委員会での報告（「NFRJ98 質問項目の検討：関係の評価・満足度項目-親子関係を中心に-」2002 年 4 月 27 日 於 慶應義塾大学）、ならびに第 76 回日本社会学会大会（2003 年 於 中央大学）での報告（「成人子による対父母関係良好度評価 - 規定要因と発達の变化」）をもとにしている。

NFRJ98 データの使用許可、および報告の際に有益なコメントを頂きましたことを記して感謝いたします。

【注】

- (1) 当時の家族関係学の代表的なテキストには、「…近親者であるがゆえに愛情が本能的に相互の間に通い、親の方は、子にあらゆる生活上の便宜と安全を与えてその幸福を追求せしめようと、年老いては財産を子に残したいと考える。子の方は、宿命的に親の温情と威厳に接しながら養育せられて、長じて個人主義的な環境に生活していても、親の老・病に際しては、子は逆に率先保護救済すべき人間関係を意識する。子は同居別居の区別なく愛情を発揮して親の幸福で平穏な生涯を願い、助け合う意欲を持っている。親子間の愛情は、国際的であり、普遍的であり、生物学的である。しかし、この親子の情も、共同生活体における自由な無制限な愛は許されない」（森本，1962：147）といった記述がみられる。
- (2) NFRJ03 では、未婚・子どもありのケースが含まれていたが、ケース数が少ないため分析から除外した。
- (3) NFRJ03 では、親が離婚しているサンプルを分析から除外した効果が大きい可能性がある。平均点でみると、親が離婚しているケース(n=31)で、結婚継続群と比べて関係良好度は低く、特に父親に対して顕著に低い。

【文献】

Acock, Alan C & Demo, David H., 1994, *Family Diversity and Well-Being*, Sage .

Bengtson, Vern L., & Roberts, Robert E. L., 1991, "Intergenerational Solidarity in Aging Families: An Example of Formal Theory Construction", *Journal of Marriage and the Family*, 53:856-870.

- Rossi, A., Rossi, P., 1990, Of Human Bonding: Parent-Child Relations Across the Life Course, Aldine de Gruyter.
- Sabatelli, Ronald M., 1988, "Measurement Issues in Marital Research: A Review and Critique of Contemporary Survey Instruments", Journal of Marriage and the Family, 50:891-915.
- 田村健二, 1969, 「現代社会における家族の情緒構造」『東洋大学社会学部紀要』8, 117-148.
- Touliatos, et al., 2001; Handbook of Family Measurement Techniques, Sage.
- Treas, Judith & Lawton, Leora, 1999, "Family Relations in Adulthood" Sussman, et al. edited, Handbook of Marriage and the Family, 2nd edition, 425-438.
- Umberson, Debra, 1992, "Relationships Between Adult Children and Their Parents: Psychological Consequences for Both Generations" Journal of Marriage and the Family, 54:664-674.
- 山田昌弘, 2004, 『希望格差社会』筑摩書房.
- 山田昌弘, 1999, 「愛情装置としての家族 - 家族だから愛情が湧くのか、愛情が湧くから家族なのか」目黒依子・渡辺秀樹編『講座社会学2 家族』東京大学出版会, 119-151.
- 山村建, 1970, 「親子関係」, 田村健二・岡村益編, 『現代家族関係学』高文堂出版社.
- 湯沢雍彦, 1973, 「大都市における老人扶養の状況」, 那須宗一・湯沢雍彦編『老親扶養の研究』垣内出版, 55-100.
- 湯沢雍彦編, 1971, 『家庭経営実験調査法』産業図書.
- 若原まどか, 2003, 「青年が認識する親への愛情や尊敬と、同一視および充実感との関連」『発達心理学研究』14-1, 39-50.